令和７年度第２回 刈谷市多文化共生推進委員会

議事録

■ 日　時 ：　令和８年３月１０日（火）午後１時３０分～３時００分

■ 場　所 ：　刈谷市役所５階５０２会議室

■ 出席者

所　　属	氏　　名
東京外国語大学 准教授	小　島　祥　美
刈谷市教育委員会 学校教育課	尾　本　　聡
刈谷市国際交流協会	斉　藤　公　人
一ツ木自治会	及　川　啓　太
ＳＢＫ	川　口　ビバリ
ＶＮＫ	チャン　バン　トン
Oasis Brasil	小　池　ソニア
市民委員	清　水　　玲
市民委員	安　田　寛　二
刈谷市 市民活動部　部長	伊　藤　雅　人

■ 欠席者

国立大学法人愛知教育大学 国際企画課	高　木　遠　慧
愛知県国際交流協会 交流共生課	杉　山　美　紀
株式会社デンソー 総務部刈谷総務人事室	今　井　正　悟

■ 事務局

市民活動部 市民協働課長	神　谷　友　理
市民活動部 市民協働課　課長補佐兼地域支援係長	加　藤　史　彦

市民活動部 市民協働課　地域支援係　主任主査	眞　野　浩　志
市民活動部 市民協働課　地域支援係　主事	木　下　和　希

■ 配付資料

次第、委員名簿

【資料】令和７年度 第２回 多文化共生推進委員会

【別添１】外国人市民の困りごと相談つなぎ方ガイド in 刈谷

【別添２】外国人コミュニティ等紹介リーフレット

【別添３】グローカルレターVol　11（案）

【別添４】日本に居住するブラジル人児童・生徒への放課後学習支援プログラム概要

■ 議事録

１．開会

◇ 出欠席者の確認、配付資料の確認

◇ 委員長あいさつ

２．議題

（１）第２次刈谷市多文化共生推進計画の重点協働プロジェクトの進捗について

◇事務局が資料を基に説明。

◇上記説明事項について、質疑等はなかった。

（２）第２次刈谷市多文化共生推進計画に関する令和８年度の取組予定について

◇事務局が資料を基に説明。

◇上記説明事項について、以下のとおり質疑応答、意見交換を行った。

委　　員：グローカルレターはどのような形で配布される予定か。

事 務 局：今回は市役所のホームページに掲載し、紙等の配布はしない予定。

委　　員：地区への回覧版や小・中学校への配布は難しいか。地区の人や子どもたちの目に触れれば参加してくれる人も増えるかもしれない。

事 務 局：前回のグローカルレターは小垣江にある輪～るど・ビレッジ小垣江を特集し、会員募集も含め、小垣江地区に紙で全戸配布したが、問い合わせも１件のみで、新しいメンバーの参加には至らなかった。費用対効果も考え、今回は紙等での配布は考えていない。ホームページやSNS等を活用し、地区の人や子供たちへ届くような取り組みは考えていきたい。

委 員 長：取り組みについて知る機会になるといい。高齢者など、ホームページやSNSを利用することが難しい人もいるかもしれないので、紙媒体でも何かできればいいと思う。

委　　員：グローカルレターを作成するにあたり、情報提供等で関わらせていただき、ワールド・スマイル・ガーデン一ツ木（以下、「ワールデン」という）と市民協働課合同で作らせていただいたので、出来る限り周知・広報をしたい。ワールデンの今後の課題としては、外国人の参加が少し減ってしまった。以前に比べ、外国人コミュニティ３団体のメンバーの参加が減っていると感じる。忙しいとは思うが、外国人コミュニティの方も是非参加していただきたいので、メンバーの方に声をかけていただき、日本人と積極的にコミュニケーションを取っていただきたいと思う。ワールデンも引き続きコミュニティガーデンとして活動したいと思っているので、ご意見やご支援を賜りたい。

委　　員：外国人の情報ツールとしてSNSは何を使用しているか。Facebookが多いのか。

委　　員：ブラジルはFacebookの利用者が減ってきており、Instagramの利用者

が増えてきている。

委　　員：フィリピンはFacebookを利用している人が多い。

委　　員：ベトナムもFacebookを利用している人が多い。

委　　員：ワールデンがキャッチやNHKに取り上げられていることが多いが、ブラジル人や南米人向けのメディアに取材をお願いするのもいいと思う。いい取り組みなので是非発信してもらいたい。

委員長：いろいろな取組が他地域などにも広がるようになればよい。

委　　員：今年度、市役所職員に向けた外国人市民対応のためのやさしい日本語研修を行っていることは理解したが、成果として職員はどのように変わったのか。外国人に伝わりやすくなったなどの変化があったのか。わかるようであれば数値で示していただきたい。

事務局：現状、数値で示せるような成果としては把握していない。引き続き、継続していくことが大切だと思っており、数値として示せるように取り組んでいきたいと思う。

委　　員：感覚としてはどう思うか。

事務局：昨年度、職員に対してやさしい日本語についての理解度調査を行った。今後は、そのような理解促進のための調査を定期的に行っていきたいと考えている。今年度の研修に関しては、別の研修の一部として短い時間で行ったものなので、どのぐらい理解してもらえたかわからないが、3年目の職員を対象に毎年実施することで、窓口対応等で意識してもらえるようになってほしい。

委 員 長：別添４の資料について、参加する子どもたちの現状として、日本で暮らして５年以上経過するが、授業についていくことが難しい児童生徒がいる。この資料に記載の子どもたちへの支援活動は学校と連動しているか。

委　　員：連動はしていない。あくまで今回、在名古屋ブラジル総領事館から依頼があり、刈谷市内の学校で募集をした時に参加希望があった児童生徒を対象に行っているもので、学校外の取り組みになる。

委 員 長：直接先生方が関わる必要はないと思うが、子どもたちの現状や分かったことなどが学校教育に活かされるように共有できればいいなと思う。

事 務 局：当初、打合せをする中では、日本語指導だけではなく、学習支援も出来たらいいという話が出ていたが、日本の教材を共有することが難しく、モデルケースとして、教員が関わらない範囲での日本語指導を目的に行っていると聞いています。

委 員 長：ポルトガル語の力を伸ばすことで、（結果として）日本語の力も上がってくるので、あえて日本語の指導ばかりしなくてもよいのではないかと思う。

３．その他

◇各委員が最近の多文化共生・国際交流の関する活動状況などについて報告。

委　　員：外国語教育の担当になることが初めてで、学校現場と連絡を取りながら１年間勉強させてもらった。学校では、日々変わらず外国籍の児童生徒は在籍しているし、転校してくる外国籍の児童生徒に対しての対応をサポートしている。来年度に向けて、サポート体制が継続できるようにしていきたい。

委　　員：国際交流協会では、毎週日本語教室を行っている。年間３００人ぐらい外国人市民が増えているので、外国人が生活に困らないような支援を

していきたいと考えている。１０月に多文化交流フェスタを開催する予定なので、各団体には協力いただきたい。

委　　員：本委員会には、地区代表として長く携わらせてもらっている。最初の会議に参加した時に、ワールデンが自立したばかりで、どういった活動をしていけばいいか見出していなかった。その話を委員会の場で話したところ、前委員長から喝をいただいた。そこからワールデンを大きくすることができた。SBK、VNK、愛知教育大学、アイシン学園、雁が音中学校、刈谷北高校など、多くの団体に参加いただいている。その中で参加しているひとりひとりが主役になってきていると感じている。深い交流もできるようになってきているのでつながりを大切にしていきたい。

委　　員：外国人人口が増え、日本人人口が減っている。経済や労働も外国人の方がいないと回らなくなってきているので、共生していかないといけないなと実感している。日本人と外国人が混ざり合って共生していけるといいなと思っている。そのためにいろんな事業展開していきたいと思っている。

委　　員：大学で日本語教育を勉強してきたので、このような場に参加することができて、ありがたいと思っている。外部から刺激をもらうことが多い１年であり、考えさせられることが多い１年であった。今後はもっと活動できるようにしていきたい。

委　　員：普段は高齢者を対象に仕事をしているが、ニーズと社会資源をどのように結びつけるかということが多文化共生も似ていると感じた。外国人だけでなく、日本人でも同じような問題が起こっていると感じている。是非、市役所の他部署とも課題を共有していただきたい。

委　　員：昨年は、メディア等で日本人ファーストや外国人を排除しようとしていると聞いたという相談がよくあった。日本でルールを守って、生活や

仕事をしていれば何も恐れることはないと伝え、今は落ち着いてきた。

委　　員：今年度、ベトナムの中秋節を祝う中秋祭りを行った。そのイベントには、刈谷市内のベトナム人だけでなく、周辺の市町村である豊田、岡崎、高浜、豊明に住むベトナム人も多く参加してくれた。また、VNK としても、他の市のイベントに参加し、交流している。最近、VNK の新しいイベントはできていないが、３月末からベトナムの母語教室を開催予定である。

委　　員：SBK には、新しく１０人ほどメンバーが増えた。個人的には、ワールドスタディ講座に参加し、子どもたちとお互いの文化について話が出来るのがよいと感じている。

委 員 長：２年間勉強させていただいた。過去に愛知にいたときには、刈谷に所在する企業と関わらせていただくことが多かったので、刈谷でボランティア活動をさせていただくことも多かった。今の仕事に就いてから、文部科学省から依頼があり、子どもたちの言葉を育てるための研究をやっている。子どもたちに対して日本語を教えることと大人に対して日本語を教えることは全く違う。子どもたちの言葉を育てていくためには、家庭の中で使っている言葉はとても重要である。各コミュニティの方には、大人にとっても子どもにとっても、家庭の中で使う言葉は大切であると伝えてほしい。家庭では何か国語も使い会話をする家庭もあるが、それでいい。両親が得意な言葉でたくさん話すことが重要である。

◇事務局から連絡事項を伝え、委員長が閉会した。